

遅れてる？ 育ってる？ 子どもたちの 社会性

いま、社会性は
どこでどう育つのか

保育者アンケートからも垣間見えた、
「社会性の育ち」への懸念。
発達専門家である
湯汲英史さんに聞きました。

「感情」を理解し、
社会性が育まれる

先日ある園で、友達関係がうまくいかず、すぐに怒って暴れる5歳児について相談されました。詳しく話を聞く中で、どうやらその子は、自分の「感情」が分かっているのではないかと感じました。

子どもは2歳頃から喜怒哀楽を言語化できるようになり、3歳を過ぎる頃には「寂しい」という言葉

も聞かれるようになります。ちょうど友達とのかかわりが多くなる時期で、「友達と一緒にあそぶのは楽しい。だから誰もいないと寂しい」というように、人を求める気持ちとつながります。そして、同じような気持ちで友達にもあることを知り、他者への共感が相手への思いやりにつながるのです。つまり、社会性の発達には「感情」の理解が必要。自分の中にわき起こるさまざまな「感情」と向き合い理解

することによって、周りに合わせて感情をコントロールできるようになり社会性が発達していくのです。

「感情」の言葉を知ること、
自分を客観視

前述の5歳児の担任には、気持ちを抑えられなくなったとき、「怒っているんだね」「悔しいんだね」など、そのときの感情を言葉にして語りかけるよう提案しました。すると数か月後には、その子はだいぶ落ち着いて暴れることも減り、感情が高ぶっても比較的早くクールダウンできるようになったとのこと。自分のもやもやに名前があることを知り、言語化で客観視できるようになり、感情のコントロールにつながってきたのでしょう。

多くの子は、こうした感情のコントロールを、子ども同士のかかわり

「社会性」は、
園で育つ！

家庭や地域で社会性が育ちにくくなった分、期待されるのは園の保育です。

以前の園では、大きな集団の一斉保育が主流でした。しかし最近では、個別に丁寧にかかわる大切さが理解され、園で社会性を育む環境は以前より整っていると感じます。

子どもにとって初めての社会ともいえる園生活。そこでの保育者との感情豊かなかかわりはとても大切なものなのです。

コロナ禍前から、
社会性を
心配する声は
あったよ



お話
湯汲英史さん
公益社団法人発達協会
常務理事・言語聴覚士・
公認心理師



次ページから、
子どもの
社会性において
気になる姿と、
そこにかかわる
育ちをみていくよ。

0・1・2歳児の 社会性

保育者との一対一のかかわりから
徐々に行動範囲を広げる0・1・2歳児。

心も体も、日々成長を感じる時期。

保育室をのぞいてみると、気になる姿がちらほら……。

イラスト にしだきょうこ (p8-23)

こんな姿が気になる！

周りの人や物に興味
を示さず、探索行動
も見られない。

周囲への
関心が薄い

おむつがぬれても、おな
かがすいても泣かない、
あやしても反応が薄い。

表情が乏しい

指さしをしない
興味をもった物を手や指
で示さず、大人が指さし
した物も見ない。

「見て見て」
がない

自分で見つけたもの、できたことなど
を大人に知らせよう
としない。

言葉が出ない

意味のある言葉を発し
ない。簡単な言葉かけ
にも反応しない。

自己主張が
見られない

「あれやりたい」「これ
はいやだ」という主張
が、言葉や態度から感
じられない。

快・不快を表情や泣くことで
表す0歳児、周りの全てに
興味津々の1歳児、「自分」に
気づき、主張する2歳児。その
中で、周囲への反応が薄かったり
自己主張が見られなかったり
する子は気になります。その背
景には社会性の発達が……？

読み解くkeyword

- 表情認知●共感●共同注視●
- 社会的参照行動●言語の発生
- 自己主張の始まり●社会的承認欲求●社会化の始まり●自他の分離

0・1・2 歳児の 社会性

発達過程と キーワード keyword

前ページの気になる姿を読み解く

キーワードを解説!

園現場からの声も紹介します。

園現場より 取材・写真協力
明徳土気こども園 (千葉県)

表情認知

赤ちゃんは人の顔をよく見ます。これは生まれたときからある能力で、いつも顔に注目しているうちにそれがいろいろ動く……つまり「表情」の変化に気づきます。これが「表情認知」といって、生後4、5か月頃から見られる発達。あやすと笑うのは表情を理解している証拠です。表情認知が他者の理解につながることで、社会性の土台ともなる重要な発達です。

表情認知を豊かに育むために大切なのは、優しい表情と声で語りかけること。ミルクを飲ませるとき、あやしてあそぶときなど、「優しい表情のときはいいことが起こる」という表情認知を促しましょう。

社会性発達にかかわる項目

0歳

表情認知

不快を泣いて表す

おむつがぬれた、眠いなど「不快」を感じたとき、不快感を取り除いてくれる存在に気づくことが「共感」関係の始まりです。かわる大人が「おむつぬれたの、気持ち悪いね」「おなかすいたの、ミルク

飲もうね」と、そのときの感情や対応を言葉に代えることで、自分の「感じ」に名前が付くことを理解していきます。そして何よりも自分の「感じ」に共感してくれる存在を知ること、安心感を得ます。「この世は安全」「この人がいると安心」と感じ、**基本的信頼関係**が築かれていくのです。

読み解く keyword
共感

あやすとほほえむ

基本的信頼関係・共感関係の形成

共同注視

「自分」の発見

喃語が盛んになる

1歳

人見知り

知らない人をじっと見る



読み解く keyword
共同注視

表情認知をし、身近な大人との共感関係を築いた子どもは、その大人の視線に注目するようになります。これを「共同注視」といい、1対1で向き合っかわりから一歩進んで、他者と同じものを見るという「三項関係」の成立につながります。同じものを見たときに大人が「ワンワン」と言ったり、逆に子どもが「あ、あ」と言いな

がら指さしたとき「ワンワンね」と返したりすることで、子どもはその対象物が「ワンワン」だと認識します。こうした共同注視からの三項関係を通して子どもは、信頼する大人との関係を深め、多くの言葉を学んでいくのです。この時期にかかわる大人は、子どもが何に注目しているのか、視線の先、指した手の先に注目し、適切な言葉を返していきけるようにしたいものです。



園現場より…

この世は心地いいと思えるように

子どもが表情や動作で表現してきたとき、ときには模倣での会話をしながら、「○○かな?」「○○だね」と思いをくみ取って返すようにしています。言葉自体を理解できなくても、自分に声をかけられたという雰囲気は感じ取るので、声のトーンなど優しく伝わるように気をつけています。

保育者がかわることで不快が快になる経験が積み重なるようにし、基本的な信頼関係を確立。そして、この世は安心、人って心地いいと感じてもらえるようにと願う0歳児期です。

1歳

社会的参照行動が始まる

感情の分化が始まる

探索行動が盛んになり歩けるようになる1歳頃。行動範囲を広げていく中で新しいものとの出会いがあり、ときに痛い思いをしたり驚いたりすることがあります。すると子どもは、何かにふれる前に身近な大人の顔色をうかがう姿を見せ始めます。例えば、きれいな花が目に入ったとき、触ろうとしたその手を一瞬止め、「触ってもいい？」と聞くかのように保育者の

顔を見る、という姿。これを「社会的参照行動」といい、大人から「いいよ」「大丈夫」と言われることで安心していろいろなものにかかわることができるのです。「大人の反応を見て自分の行動を決める」という実に社会的な行動を通して、自分にとっての「安全・危険」「良い・悪い」などをまざままなことを学んでいくのです。

0・1・2歳児の社会性

「自分の」という意識をもつ

大人の言葉をまねて言う

言語の発生

物の取り合いが多くなる

「いや」が多くなる

前述の通り、子どもが指さしたものを「ワンワンね」「電車だね」などと答えることで、言葉を獲得していく子どもたち。1歳を過ぎると、周りの大人の言葉をまねて発するようになっていきます。これは言語発達にとっても大切なことで、知らない言葉をまねするというのは8歳頃まで続きます。つまり、知らない言葉を言う人が周りに

にいないと言葉を覚えられない。言語獲得のこの時期は、周りの大人のかかわりがとても大切なのです。言葉がなかなか出ない子には、無理のない範囲で促すといいでしょう。単語をワークのように教えるのではなく、あそびの中で、名前を呼んで返事をする、「チヨウダイ」と言ってから物を取るなど、人とかかわる言葉を意識して使っていくましよう。

自己主張の始まり

自己主張が始まる

1歳を過ぎた頃に芽生える「自分の」という意識。自分の大切な人や物を取られたくないという思いが強まることで、「自分」が形づくられるでしょう。そして2歳に近づく頃にはなんでも「自分で」やりたがり、着替えや食事などあらゆる場面で「いや」を発達するようになり、いわゆる「いやいや期」が始まります。大人の言うことや

考えに納得できるまで成長すると、自然に「いやいや期」を抜けていきますが、それまでは言うことがなかなか伝わらず、かわる大人にとってはつらい時期が続きます。ただ、「伝えるムード」は大事。頭ごなしにダメと言うのではなく、「○○だから、ダメなんだよ」と、理由を言うことで、何か自分に伝えようとしているムードは伝わります。穏やかな、ゆっくりとした口調も大切。そういう丁寧なかかわりを続けることが、「この人の言うことは聞いてみよう」という気分につながります。



画現場より...

かわり過ぎない、その加減を大切に

子どもが注目しているものを繰り返し言葉に代えていくことが言語の獲得につながる。ただ、言葉かけをしすぎないようにということも考えています。子どもが何かに夢中になったり、探索活動を楽しんでいるときは、少し距離をおいて、いまそこで子どもが何を楽しんでいるのかをしっかり捉えながら、そっと見守ります。そうしないと、せっかくの集中を妨げることにもなりかねません。

他者を意識し始める

「自分で」という意識をもつ

2歳

2歳

社会的承認欲求が
芽生える

喜怒哀楽が
はっきりしてくる

読み解く
keyword

社会的承認欲求

子どもは2歳前後から「〇（マル）」や「できた」がよいことだと思いい、その評価を得たいと求めるようになります。この気持ちを「**社会的承認欲求**」といい、大人の「マル」や「できたね」といった肯定的な評価を喜ぶとともに、これは良い言動だと理解します。そうやって社会に適応する言動を学んでいくのです。

承認欲求がなかったり薄かった

すると、周りを気にすることがなく自己評価しかないので、自分勝手に思ったり自己中心的に見られたりすることもあります。いつまでも「できた」を言わない、承認を求めない子には、言葉や簡単な作業を一緒に行うなどして「できた」を言える場面を意図的につくっていくのもいいでしょう。

読み解く
keyword

社会化の始まり

言葉で気持ちを表し始める
(社会化の始まり)

2歳の半ば頃から、子どもは「気持ち」を言葉にし始めます。それは大人とのかかわりの中で学んでいくのですが、例えば、一緒に遊ぶことが、目に見えない自分の気持ちに気づきます。おもちゃが壊れたとき、「壊れちゃったね、悲しいね」と言葉をかけられ、この自分の感情は「悲しい」という名前

なのだと気づきます。こうして「楽しいね」「悲しいね」などの言葉を耳にしながら、相手も自分と同じような気持ちなのだと感じられるようになっていきます。他者との共感関係を築ききっかけともなるため、言葉で気持ちを表すようになると「**社会化の始まり**」だといわれたりもします。



相対的な見方が
でき始める

平行あそびが
見られる

3歳

「なんで」と
質問するようになる



自他の分離が始まる

読み解く
keyword

自他の分離

1歳児の「自分の（もの）」や「自分（やる）」を主張する段階を経て「自分」の意識が高まると、やがて自分以外の「他者」の存在に気づきます。そして2歳児期には、自分と違う他者の存在を認めることで、持っている物を他者に渡すといった簡単なやり取りが見られるようになります。

自分と他者を区別して考える「**自他の分離**」により、子ども同士のかかわりが生まれるのです。

現場より…

「できた・できない」の
価値観を植え付けない

「見て見て」が多くなる時期ですが、「できた・できない」「上手・下手」で評価しないように気をつけています。例えば自分の作品を見せに来た子に「上手!」「きれいにできたね」などと言うと、うまく描いたり、きれいに作ったりするのがいいこと、大人が喜ぶことだとインプットされ、それができないとダメだと思ってしまう、後にそれが自己肯定感の低下につながることも。「大きく描いたね」「いろいろな色があるね」など、子どもがまた描いてみたいと思えるような言葉遣いを考えています。いろいろな表現があってもいい、ということを伝えていきたいのです。

0・1・2
歳児の
社会性

自分の「好き」を知り、他者との違いに気づく3歳児、人の内面に気づき始める4歳児、仲間や社会の中での自分を考え始める5歳児。その中で、周りとかかわりを求めず、興味や活動範囲が広がらない子は気になります。その背景には社会性の発達が……？

読み解く keyword

- 「好き」という気持ち●少人数であそぶ●思い出す・振り返る●人の内面に気づく●努力を認めてほしい●勝ちたい気持ち●仲間意識・帰属意識●「自分は大切な存在」という実感●感情のコントロール力

3・4・5歳児の社会性

保育者から離れ、友達とかかわりが多くなる3・4・5歳児。あそびも広がり、活動も深まりを見せる時期。園庭をのぞいてみると、気になる姿がちらほら……。

こんな姿が気になる！

評価に過敏で、失敗への不安が強く、のびのびと活動できない。

周りを気にしすぎる

「好き」が見つからない

好きなもの・ことが分からず、何かに夢中になることもない。

いっしょに行く？

集団活動を受け、誘っても来ない。いつも1人であそんでいる。

集団参加を嫌がる

思い通りにならないとダメ

自分の思い通りにならないとひどく怒り、なかなか立ち直れない。

勝ち負けに非常にこだわる

勝つことや一番にこだわり、負けたら非常に落ち込む。

恐れ・不安がまったくなくない

「こうなったらどうしよう」という先への不安がない。高所や危険な所も怖がらない。

3・4・5 歳児の 社会性

発達過程と
キーワード

keyword

社会性発達に
かかる項目

3歳

「好き」という
気持ちが高まる

少人数で
あそぶ

順番を
意識し始める

思い出す、振り返る
ようになる

4歳

ままごと
(役割あそび)を
始める

社会的承認欲求が
高まる

読み解く
keyword

「好き」という
気持ち

自我が発達する3歳頃、「〇〇が好き」という気持ちがはっきりしてきます。この「好き」は人それぞれで、「これが好きなのが自分」だという自己理解にもつながります。

子どもは自分の「好き」を否定されたり、無視されたりすると怒ります。「自分の好きなものが尊重されない」ことで、自分自身が否定されていると感じてしまうのです。子どもは自分の「好き」を主張しながら、人と気持ちが違うことがあると学び、他者を理解し始めるのです。

社会性の発達において、自己理解・他者理解は重要です。かわる大人は、「〇〇ちゃんはこのが好きなんだよね」「好きだからこれがしたいんだね」など、意識的に「好き」という言葉をかけて、子どもが自分の「好き」に気づけるようにしていきましょう。

読み解く
keyword

少人数であそぶ

3歳児は、周りの友達への関心が高まり、少人数であそぶようになります。ちょうど「好き」という気持ちが高まる時期でもあるので、「好き」が同じ子同士で一緒にあそぶことが多いようです。同じような格好をして〇〇こつこやままごとを楽しく遊ぶ姿も見られるようになります。

ままごとでは、赤ちゃんのお世話をしたり、お料理をしたりしますが、その経験を通して子どもは「役割」に気づき始めます。役割の意識は自分を客観視することにもつながり、社会性の発達において重要です。

読み解く
keyword

思い出す・
振り返る

3歳頃から、これまでやったことを思い出せるようになります。過去が意識化されるので、例えば園の連絡帳に何が書いてあるのかを気にしたり、自分の失敗したことを書かないで言うようになったりします。4歳近くになると徐々に自分の内面(感情)に気づくようになるので、自分のしたこと(過去)を振り返って、いやだと思ったり、うれしい気持ちになったりするのです。

なお、人のいちばん初めの記憶は3歳頃が多いといわれます。自我が発達し、「好き」という気持ちをはっきりしてくる年齢。好きという気持ちはそれまでの漠然とした感情とは違って、自分で意識するものです。過去を振り返るようになる時期と、「好き」という気持ちがはっきりする時期が重なり、自分の記憶として残るようになるとも考えられます。

園現場より...

その子のペースに
合わせて

興味をもったものにすぐ飛びつく子もいれば、遠くでじっと見ているけど、なかなか近づかない子もいて、「好き」への向き合い方は人それぞれ。保育者が気をつけたいのは、それぞれのペースを尊重すること。

離れて見ているときにすぐ誘うのではなく、そっと視線を合わせてニコリ笑うだけしたり、終わってから「明日やってみる？」と声をかけたり……。いま、その子がこのあそびに対してどんな思いがあるのかを探えて、気持ちに添ったかわりができるように心がけています。

4歳

人の内面(感情)に
気づき始める



4歳頃から人の内面(感情)に気づき始め、心の中の「なんとなくの不安」を感じるようになりま
す。このなんとなくの不安からくる葛藤が、かんしゃくを起こしたり暴言を吐いたりという姿に表れることも。この不安や恐れといった感情は、ない方がよいと思いがちですが、実はとても大切な感情。不安や恐れがあることで、「〇〇しないように」と防御する力、自分

を守る力が育つのです。
この内面で葛藤する時期、一人でポーツとしている姿もよく見られ、「何を考えているのか分からな
い」ということも。無理に感情を引き出そうとしたり、言い聞かせたりせず、不安が少しでも和らぐよう、そつとそばに寄り添ったり、優しく言葉をかけたり、気持ち安定するようなかかわりを心がけま
しょう。

人の嫌がることを
言うことがある



努力を評価
してほしいがる

4歳を過ぎた頃から、自分の得手不得手が分かるようになり、失敗したり勝負に負けたりして「つらい」「悔しい」思いを経験します。この時期に大切なのは、人から認められること。
その頃の子どもは、内面を理解するようになってきているので「できた」という結果ではなく、「頑

張ったよね」という努力や経過での評価を求めるようになります。これは、「失敗しても大丈夫」と言われ、人から認められた経験から自己安定感が育っている証拠。自己安定感がないと、「できそうもないけど頑張る」といった挑戦する気持ちが起こらず、競争場面を避けることにもなりやすいのです。

努力を認めてほしい

「つらい」「悔しい」
気持ちが出てくる

「勝ちたい気持ちが
強まる

読み解く
key word

勝ちたい気持ち

少し大きな集団でルールのあるあそびをするようになる時期。勝ち負けの意識が強まるとともに「1番、2番」といった順位数も理解できるようになるので、1番にこだわる姿も出てきます。負けて大泣きしたり、友達に当たったり

ということも出てくるでしょう。その一方で、負けないように頑張る気持ちや、友達を応援したり、悔しさに共感して慰めたりという行動(向社会的行動)を生み出すのも「勝ち負け」の経験から。
トラブルを避けるために勝ち負けをあいまいにするのではなく、競い合いを通して、負けたときには「残念」「次は頑張ろう」というように、悔しいけど、勝つこともあれば負けることもあるということや、感情を抑制する方法を教えていきましょう。

園現場より...

気持ちや頑張りに目を向けて

周りが見えてくる時期。例えば足が速い(と思っている)自分を見られなくて、かけっこを嫌がる子も出てきます。保育者としては、その子なりの一生懸命が大事だと伝えたいので、気持ちや頑張りに目を向けた言葉をかけたいと思います。そういう大人のかかわりを子どもはよく見ていて、後に子ども同士で「頑張ったよ」「一生懸命走ったね」と言い合う姿を見ると、保育者の言葉かけの大切さを痛感します。

全能感・挑戦意欲が
高まる

集団であそぶ
ようになる

5歳

3・4・5
歳児の
社会性

5歳

仲間意識・帰属意識が
芽生える

ルールを理解し、
守ろうとする

自他の能力の
違いに気づく

恥ずかしいという
気持ちが出てくる

感情のコントロール力を
つけ始める

子ども同士の世界を
大切にする

6歳

読み解く
keyword

仲間意識・帰属意識

5歳児になると、クラスの一員だという意識が強くなります。「仲間意識・帰属意識」の芽生えです。この時期の集団は、好きな子同士ということではなく、同じ目的に向かって役割分担をしながら活動するという形に成長していきます。活動の中で、「字は〇〇ちゃんに書いてもらおう」「リレーは△△ちゃんに」というように、個々の得意を生かせるように配役する姿も見られます。そんな中に仲間意識の薄い子がいると、周りを気にせず動くため溶け込めないことも。そういう子には、役割をはっきりさせ、集団の中での自分を意識できるようにするとよいでしょう。

読み解く
keyword

「自分は大切な存在」という実感

自他の能力の違いに気づく時期ですが、それにより周りの評価をひどく気にする子がいいます。これまで「できた・できない」「上手・下手」という評価を受けすぎたため、失敗を恐れ、何事にも挑戦できなくなっていることも。評価の言葉を使わないようにするなど慎重に対応する必要があります。また、このように自己肯定感が低く挑戦意欲がない子には、大事な物を運ぶなど重要な役割を任せるのもいいでしょう。自分は期待され、大切な存在だという実感をもちることができると、手伝ってもらった「ありがとう」「助かった」などの言葉も忘れずに。それにより「人の役に立ちたい」という思いが芽生え、社会性が育まれます。

読み解く
keyword

感情のコントロール力

5歳児になると、より大きな集団であるようになり、その際、子どもたちは、あそびの内容や目的を理解し共有する必要があります。また、ルールを理解し、それを守る力も必要になってきます。みんなであそんでいるとき、ルールを守れないと友達から嫌がられます。この頃から、大人より、「友達がどう思うか」を重視するようになってくるので、友達に嫌がられないよう気持ちを抑制するようになるでしょう。この5歳児の集団あそびで育まれた感情のコントロール力は、小学校以降の友達づくりなど社会性発達の土台となっていきます。

園現場より…

「人に頼む」は重要な社会性

5歳児のグループ活動では、それぞれの得意を生かす役割分担が見られます。背景は絵が得意なAちゃんが描いて、製作が得意なBちゃんは船を作る……というように。そして自分の苦手なことを、得意な子に「やって」とお願いする姿も見られます。相手の良さを知り、自分の苦手を知り、それを受け入れた上で人に頼むということは、人間関係において重要なスキル。もちろん、苦手を乗り越えてほしいと願う気持ちも忘れずに大切に育みたいと思います。

3・4・5
歳児の
社会性